

『四洲志』と魏源増補による『海国圖志』(1)

— 書誌的な比較による『四洲志』の本文の検討 —

下河部 行輝

1 はじめに

林 則徐の公表した『四洲志』の原典がどこにあるかを記したものが日本に存在するかどうかは未だに見出せないでいる。この『四洲志』について述べたものも大変少ないことも事実である。この『四洲志』については、鮎澤信太郎氏が『鎖国時代 日本人の海外知識』(注1)で書かれたが、このお書きになられたことは佐々木正哉氏が詳細に訂正された(注2)。また百瀬弘氏もこの『四洲志』に触れてはいるが(注3)、現物を見たとは書いてはおられない。『江戸時代における唐船持渡書の研究』(注4)においても、『四洲志』が日本に渡ったとは明記していないし、少なくとも『四洲志』は日本に存在するものなのかどうか不明である。今回の日本各地の図書館・大学等における調査においても(注5)、この『四洲志』に関する存在の確認は残念ながら出来なかった。日本のみならず本家中国においても、『四洲志』の存在については未だに、私は確認していない。実際に『四洲志』は原文が確認出来ないのかと言えばそうではなさそうである。一つには『小方壺齋輿地叢鈔』の再補編第12帙に収録されている『四洲志』、もう一つは『海国図志』の本文としての『四洲志』である。この両者については大きく二つの意見がある。

『四洲志』の本文について述べたものに百瀬氏の「海国図志小考」という論文がある(注6)。氏の言い方を引用すれば次の通りである。

世界地理書としての「海国図志」の骨格をなしているのは、周知のように、アヘン戦争中林則徐が広東で訳出させた稿本四洲志すなわちイギリスの地理学者マレーの世界地理書 Hugh Murray, *Encyclopaedia of Geography, a Description of the Earth, physical, statistical, civil and political.* の1834年初版本の抄訳であって、魏源の序文にも明記されているが、本文中には、三種のテキストともに、「原本」とか「原有」とか注記されて収録されており、この原文すなわち「四洲志」の文を含む巻にはその巻首に必ず「欧羅巴人原撰、侯官林則徐訳、邵陽魏源重輯」と訳され、魏源輯とか魏源撰としてある他の諸巻と区別できる。

この説明の中で「この原文すなわち『四洲志』の文を含む巻には」という書き方のところを注目すると、百瀬氏は、『海国図志』の文は『四洲志』そのものと同じと見ていることになりはしないか。さらにはこの箇所の注記として次のようにも記している。

100 巻の巻34 (50巻本巻21) のように注記が脱落したところもある。しかし、前後の関係からみて、

原本たることは明瞭である「小方壺齋輿地叢鈔」再補編所収の「四洲志」は「海国図志」50巻本所収の原本の部分を集めたものとおなじである。

この注の「原本たることは明瞭である『小方壺齋輿地叢鈔』再補編所収の『四洲志』は」という表現は、間違いなく『四洲志』の原文を認知していると言えよう。つまり50巻本の本文と『小方壺齋輿地叢鈔』再補所収の『四洲志』とは同じもので、両者を原文であるとしていることになる。ただ50巻本の『海国図志』は魏源の注があり、巻々が増補されているので、『四洲志』のように『海国図志』は本文が通して書かれている訳ではないので、今両者の関係を示しているものが管見の限りないので、詳細に記述して見たい。

2 『四洲志』と50巻『海国図志』との関わりについて

『海国図志』50巻本について述べられているものに佐々木正哉氏の「『海国図志』餘談」(注7)がある。大変明解な論述であるので、該当の箇所を引用させて頂く。

「まず五十巻本を見ると、扉の裏に二行に分けて『道光甲辰仲夏・古微堂聚珍板』とあり、本書が道光二十四年(一八四四)仲夏、即ち五月に古微堂より木活字版で刊行されたことが分る。そして巻首の『海国図志叙』の末尾に『道光二十有二載、歳在壬寅嘉平月、内閣中書邵陽魏源、叙于揚州、時夷艘出江、甫逾三月也』とあるから、本書が成ったのは道光二十二年嘉平月、即ち十二月で、南京条約の調印が終り、英国艦隊が揚子江を退出してから三ヶ月をすぎた時であったことが分る。この序文の日附は明らかでないが、道光二十二年十二月一日は西暦では一八四三年一月一日になるから、『海国図志』の完成は西暦では一八四二年ではなく、一八四三年一月になる。」とある。

中国の暦と西暦の関係を示されて、さらに日本での50巻本の所在について触れておられる。

「特に五十巻本は極めて稀で、私の知る限りでは、公共の図書館、研究所等で本書を所蔵しているのは京都大学の人文科学研究所だけである。外には本郷の井上書店が数年前から一部を珍藏しており、同店の書目にも掲載されている。」

つまり、日本では京都大学にのみ存在するということになる。そして、この事実は今回の私の調査においても裏付けることが出来たのである。(注8)

さて、所在については以上の通りであるが、『四洲志』とこの五十巻本との本文のあり方について示してみたい。『小方壺齋輿地叢鈔』所収の「四洲志」については既に記したが(注9)、この「四洲志」の本文は柱題で「四洲志一」から「四洲志四十九」で示されてはいるが、その頁と柱題とは厳密には区別されてはいない。各葉の柱には記したように「一」から「四九」の通し番号はあるものの、本文では全く区切りは示されていないので、どこからどこまでが巻1と巻2の区別が分からない。そこで『海国図志』50巻本との比較によりそれが明瞭になるものの、『四洲志』そのものの存在が今のところ不明である以上、あくまでも仮定と言うことになろう。何故ならば、『小方壺齋輿地叢鈔』に所収されたものが、林 則徐の原文であるとして、50巻本『海国図志』の巻々に収められた原本(魏源の代表的な呼称)が『四洲志』(『小方壺齋輿地叢鈔』所収のもの)の巻々からそのまま引用していて編集の手が加え

られていないということが前提だからである。そこでこのような仮定に立って、『四洲志』と50巻本『海国図志』との両者を示すと、次のようになる。(注10)

3 『四洲志』と50巻本『海国図志』の巻々の照応について

『四洲志』の文章が『海国図志』に登場してくるのは、『海国図志』の巻3からである。ところが、『海国図志』そのものは、諸本の引用が多く巻3の冒頭から引用書の文章が始まる。以下『四洲志』は『小方壺齋輿地叢鈔』における本文の実態を示し、『海国図志』はその文章の構成とその巻々に示された書本の引用書名とを合わせて示してみる。『四洲志』の本文は全て始めは『で示し終わりは』で示す。

四洲志一 [一行40字] →海国図志巻3 (東南洋1) [1行21字但し二行のものは42字]

○ 『安南國在～部落二十有一』 20行

阿細亞洲總説

西暦に対する中国の年号は、二行書きである。
以下同じ。

☆明艾儒畧職方外紀 17行

○越南1 『安南國在～滅仇復國』 8行

☆案11行 (魏源の注で二行書で注) (一行42字)

○「光中王既感歐羅巴之～部落二十有一」 34行

☆聖武記29行

☆英吉利夷情紀畧 9行

☆武林郁永河裨海紀遊15行

☆余文儀臺灣志 7行

☆澳門紀畧 5行

★魏源曰 7行

☆「越南疆域附考」

- 皇清通考四裔門39行 (二行書)
- 一統志 7行 (二行書)
- 粵中見聞16行 (二行書)

『海国図志』における増補は他の文献と魏源の注によるが、『四洲志』の地名や事実に対するコメントが入るので、その『四洲志』に対する魏源の注を簡略に示す。短い文は原則として全部掲載する。

四洲志と海国図志の本文	海国図志の中の魏源の注
傳依	此曰傳依後又曰虎地蓋西京順化港之異名也
兩小國	干波底阿地接廣南當即明史之賓童龍與占城壤者蓋廣南以東瀕海之小國
于千有七百九十年滅仇復國	案此志謂安南光中王冲幼被篡事在乾隆三十九年～爲阮光平無疑→ 465字
眉公河～注之海	眉公河似指富良江其上游即雲南之瀾滄江經安南入海

『四洲志』の「一」の最後の一節は次の通りであるが、『四洲志』では二行書きで示されるが、『海国図志』では、一行で印刻されており、更に二行書きで注記がある。

安南國東界海南界海西界暹羅北界中國廣西以虎地爲國都領部落二十有一

[原本部落名皆夷語今刪之其安南郡縣具詳前史]

魏源の注記は、二行でこのようになっていて、「原本部落名皆夷語」とあるのだが、『四洲志』にはないのは本当に『小方壺齋輿地叢鈔』の文が『海国図志』とは無関係に印刻されたのか、疑問の箇所である。

四洲志二 [一行40字]

海国図志卷5 (東南洋3) [1行21字但し二行のものは42字]

○『安南暹羅緬甸三國～羅緬之曼谷國都出海』26行 ○暹羅一『安南暹羅緬甸三國～國都出海』50行★

△曼谷以下加磨阿迄21都市名(二行書)』約1行 ○「曼谷以下加磨阿迄21都市名」(一行に2都市名)

☆重輯 原無今補 として以下収録

☆皇清通考四裔門75行

案 彌南河當即雲南之瀾滄江至暹羅土名黃河水極膏沃
11行★源案二十四部落名目與官書四裔考不符姑存備考

☆海國聞見録40行

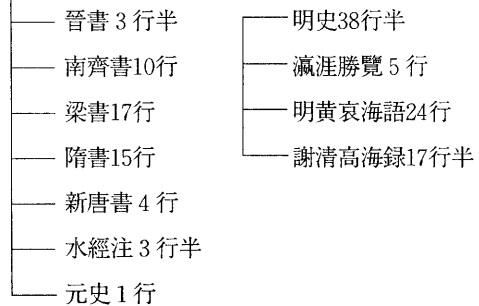
☆劉健庭聞録5行

☆愈燮癸巳類藁15行

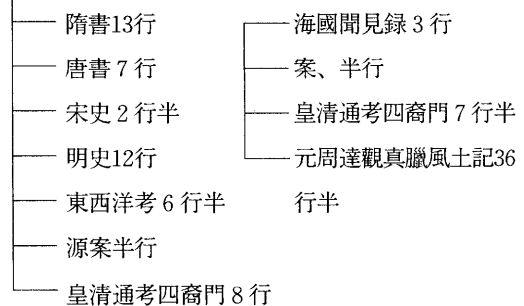
☆聖武記11行

★魏源曰33魏源33行

☆暹羅本國沿革一(引用書は全て2行割で1行42字)



☆暹羅屬國沿革二今東[土+甫] 塞古真臘○原無今補

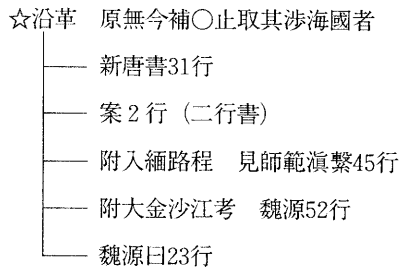


『四洲志』の本文に対する魏源自身の注は、この巻には見られない。

四洲志三 [一行40字] → 海国図志卷7 (東南洋5) [行21字但し二行のものは42字]

- 『緬甸與暹羅安南三國～麻羅城入海』 27行
- 緬甸國東界南掌暹羅西界孟阿臘南界海
北界西藏雲南以阿瓦爲國都領部落四十
有八戸口約四百萬名阿瓦以下母哇』の50
地名迄全て1行に2行書きで示される。
- 緬甸 『緬甸與暹羅安南三國～麻羅城入海』 52行
- ★案 伊底河謂雅魯藏布江即大金河江也(二行書き)
- 「緬甸國東界南掌暹羅西界孟阿臘南界海北界西藏雲
南以阿瓦爲國都領部落四十有八戸口約四百萬名阿瓦
以下母哇』の50地名迄全て1行に2地名ずつ示される。
地名だけで24行。

『四洲志』と違い本文と同じ字形で印刻される。



この巻については『海国図志』の本文に注が一つある。

麻羅	大金沙江由此城西入東印度
----	--------------

四洲志四 [一行40字] → 海国図志卷13 (西南洋) [1行21字但し二行のものは42字]

- 『印度國即興都斯頓也～即茅爾日數部而已』 12行
此數部乃中～即此數部也 約1行二行書き
- 「孟阿部臘以加爾格達～每滿價約百二十五員」 18行
- 「五印度東界西藏～墨那敏佛教」 約20行
は二行書き
- 三印度國 二行書きの注あり。
- 『印度國即興都斯頓也』 二行書きの注あり。
- 「地隸阿細亞洲西南地～仍未載及主國者爲誰」
二行書きの注あり。
- 「大西洋有公記～悉歸蒙古」
「嗣各部落隔大山之～以馬拉他爲最強」 二行書きの
注あり。
- 「至西北温大壓山～即茅爾日數部而已」 2行にわた
り二行書きの注あり。
- 「孟阿臘以加爾格達爲首部～加稔那一人」 注あり。
- 「駐筭孟阿臘理糧～英國所轄河道三安治士河」 注あり
- 「發源謙麻那壓山～每滿價約百二十五員」 以上原本
- ★案 此所述鴉片專指麻尼哇一處非全數麻尼

哇一作麻爾注乃自主部落非英夷所轄

☆重輯 原無今補

☆貿易通志曰34行

☆毎月統紀傳曰34行 無皆今補

☆海島逸志曰3行

★案 道光二十二年～詳見于下8行二行書き

☆毎月統紀傳曰40行

○「五印度東界西藏～墨那敏佛教」99行(『四洲志』
と違って『海国図志』本文と同じ活字で二行書き
はしていない。

☆三印度補輯 二行書きの注あり。

☆高宗御製文集5行

☆又御製詩集7行

☆海國聞見録29行 — 按 二行書きの注あり

★ — 案 二箇所に二行書きの注あり

□中印度補輯

☆西域聞見録49行 — ★案 二行書きの注あり

□東印度補輯

☆海録73行 — ★案 二行書きの注あり

☆海國聞見録4行

☆粵商回述11行

□南印度補輯

☆海國聞見録7行

☆海録82行

□附録

☆魏源西藏後記31行

☆又乾隆廓征爾喀記75行

★臣源曰95行

★臣源曰16行

この巻には魏源が比較的多く注を付けている。 ☆附澳門月報 即所謂新聞紙

[三印度國]

三印度國 (魏源の分類)	「東南中三印度今皆屬英吉利惟西北二印度各自爲國」
興都斯頓	「一作痕都斯坦一作温都亦有作軒都斯丹者」の注あり

地隸阿細亞～主國者爲誰	「竟不知印度爲古佛國～似未盡改回教者未詳其故」82字
蒙古	此蒙古謂賽馬兒罕之王
以馬拉他爲最強	此南印度主國非東印度之孟加臘也
茅爾旦數部而已	此數部乃中印度南印度之邊境未盡屬英吉利者～即此數部也 69字
加稔那	加稔那官名也
安治土河	即恒河
滿	六十斤爲一滿

四洲志五・六〔一行40字〕・・・・・・→海国図志卷14（西南洋）〔1行21字但し二行のものは42字〕

- 『巴社國又名巴爾齊亞～小部落二百六十有六』34行
- 『阿丹國一作阿蘭一名阿臘比阿～餘俱購自阿米里加洲』39行
- 西印度之巴社國 約二行にわたり注あり
 - 『巴社國又名巴爾齊亞～小部落二百六十有六66行六箇所に注あり。
 - 西印度之巴社國沿革約2行にわたり二行書きの注あり
 - ☆宋唐書44行
 - ☆宋史18行
 - ☆職方外紀29行
 - 阿丹國一作阿蘭一名阿臘比阿～餘俱購自阿米里加洲』75行 2箇所に注あり
 - 西印度之阿丹國沿革約2行にわたり二行書きの注あり
 - ☆新唐書24行
 - ☆明史42行
 - ☆瀛涯勝覽23行
 - ☆明史21行約2行にわたり二行書きの注あり
 - ★源案史言丹丹國～安得混爲一乎44字
 - ☆明史44行約3行にわたり二行書きの注あり
 - 島夷志略7行
 - 各國回教總考
 - ★案阿丹默德那皆天方也～故別爲總考于後4行
 - ☆杭世駿景續考曰38行6カ所に注あり
 - ☆每月統紀傳曰31行
 - ★案約2行にわたり二行書き
 - ☆廣東通志曰38行
 - ☆西域圖志26行

☆西域聞見録50行

☆天方教考上 魏源50行5箇所に注あり

() で括ったのは『四洲志』にはない。

☆天方教考下69行3箇所に注あり

〔西印度之巴社國〕

★魏源曰46行

(西印度之巴社國)	一作包社一作高奢一作報達一名百爾西亞即漢之安息唐之大食皆西印度
新都司頓毘連	即温都斯坦
韃韃里毘連	韃韃里即西哈薩克西布魯特各部
額力西所覆	額力西一作厄勒祭在意大里國之東今并於西都魯機
加士比奄海	即裏海也亦名鹹海亦名北高海
小部落二百六十有六	部落名目原本闕

〔西印度之巴社國沿革〕

(西印度之巴社國沿革)	唐以前回教已見西印度内唐以後爲大食爲包社爲伯爾西亞國～原無今補43字
七百以前	唐武后時
二百年	明英宗正統初距元太宗未計二百年
嘉靖時製方邱～部議已之	此大謬阿丹即天方也～二千里則得之矣84字

〔各國回教總考〕

穆罕默德	四譯館考作謨罕賽德
百十有四部如討刺特	降與母撒之經名
則逋爾	降與達五德之經名
引支約	降與爾撒之經名
自開皇至唐元～茹葦屏渾酪	見新唐書回紇傳
二年正月～置摩尼寺許之	見舊唐書憲宗紀
明洪武時～謂不齒之民也已	道古堂文集
倍昂伯爾	即派罕巴爾
則逋爾經	降與達德之經名
引支勒經	降與爾撒之經名
時念眞宰	有日念有心念
日禮五時	有散禮有聚禮
歲齊一月	盡絕葷肉
歲捐課財	謂施舍于寺申
五食以食穀蔬果肉飲	五食各五五穀五蔬五果五肉五飲共二十五品

凡我域中不容毆若堂	毆若堂天主教也祝虎院俗謂挑筋教也
穆民忌野居	穆民猶言信士
稱王者五十餘	方言再王曰蘇魯檀
稱帝者七	方言云墨利奇

四洲志七・八〔一行40字〕・・・・・・→海国図志卷16((卷立の注15字 1行21字但し二行のものは42字)

- 『都魯機國疆域在～在肆馬那部内約58行 〇南都魯機國 86字にわたり注あり
- 南都魯機在阿細亞洲～二十有五』二行書き 6行 〇『都魯機國疆域在～在肆馬那部内』110行注1 箇所
- 〇南都魯機在阿細亞洲～二十有五』24行一行書き注1 箇所
- 〇南都魯機國沿革二行にわたり注あり二行書き40字
- ☆職方外紀32行
- ★案後漢西域傳～此五里石梁之譌傳28字二行書き
- ☆新唐書二行34字
- ☆文獻通考二行26字注あり
- 坤輿圖說三行45字
- 〔南都魯機國〕
- ★案爲他國所并者即指度爾格國兼井之言

額力西	額力西歐羅巴洲大國一作厄勒祭任意大里之東今並于西都魯機
阿那比阿	阿那比河即阿丹也

〔南都魯機國沿革〕

(東女同)	東女在葱嶺東南近吐番後亦爲吐番所滅
-------	-------------------

四洲志九・十〔一行40字〕・・・・・・→海国図志卷20 (小西洋) [1行21字但し二行のものは42字]

- 『伊揖國在阿未利加洲之～百四十有一』30行 小西洋の注として東利未亞二大國別爲此卷
- 「羅阿伊揖～安河摩伊市河』二行書き約3行 〇利未亞洲總說 (原本無今補輯)
- 『阿邁司尼國東距海～爲首部亦日根達』37行 ☆職方外紀53行
- 〇利未亞洲各島 (原志此洲不載島國今取職方外紀補之)
- ☆聖多默島20行
- ☆貿易通志曰15行
- 〇伊揖國注二行書き約3行此洲至今～以下原本
- 『伊揖國在阿未利加洲之東北～亦無遺蹟可徵6』行
- ★按坤輿說載天下七奇～今皆湮沒耶二行書き約4行
- 「惟聞上古西梭特力士～百四十有一』51行

○「羅阿伊揖～安河摩伊市河」 1行書き14行

□重輯 (原本無今補)

☆(職方外紀) 34行[この書名は60巻本による]

☆毎月統紀傳曰26行

★案此國救荒之法亦見職方外紀12字

□阿邁司尼國 即職方外紀之～廣東通市二行書き約25字

○『阿邁司尼國東距海～惟雕塑泥水』 43行注3箇所あり

★案此處可證加特力與波羅士特二教不同處18字

○「國中亦有道觀規矩～爲首部亦日根達」 原本30行注1箇所

□重輯 (原無今補)マ

☆職方外紀曰47行注2あり

★源案二行書き約12行

[阿邁司尼國]

奉由斯教	由斯即回教之最舊者佛經謂羅門在麻哈蜜以前猶中國孔子未生有儒教也
回教之主從未至此	原書中稱回教曰馬夥沒教或曰馬賀墨頓教又曰麻哈密教皆音之轉
奉由斯之規矩戒宿戒食童割勢皮	據此知由斯教是回教
入回教	此亦以由斯教爲回教

[職方外紀]

入朝爲我大必闢赤赴算彈	華許國主也
-------------	-------

四洲志十一・十二・十三 [一行40字]・→海国図志卷21(小西洋)[1行21字但し二行のものは42字]

- 『東阿利未加洲濱臨～大官取血以飾宮室』 36行 小西洋の注として東北南三利未亞共爲此卷
- 『阿利未加洲之北～大部落二小部落五十』 20行 □東阿利未加洲
- 『摩羅果東界～手巾氈帽』 二行書き約2行 ○『東阿利未加洲濱臨～大官取血以飾宮室』 71行注3あり
- 『阿爾尼阿國古時～退居港口不屯內地』 8行 □北阿利未加洲四國二行書き28字即職方外紀～佛蘭西藩屬
- 「阿爾尼阿東界～果實珊瑚」 二行書き約1行 ○『阿利未加洲之北四國曰～南嶺小部落九』 87行注3あり
- 「都尼司國在阿爾尼阿～戸百萬口有奇」 11行 □重輯 (原無今補)マ
- 特黎波里東界～南嶺小部落九 二行書き約2行 ☆職方外紀曰11行注3あり
- 『南阿利未加三面～歌舞徹數晝夜』 29行 □南阿利未加洲各國
- 『南阿利未加三面～嗣西洋改其名～山峽情景可觀』 ○『南阿利未加三面～嗣西洋改其名～山峽情景可觀』
- ★源案東方語先～峽兀賀也39字
- 「峽長五百八十里～歌舞徹數晝夜58」 行注4あり

□重輯 (原本無今補)

☆新唐書曰 4 行

★案利未亞各烏鬼國見史者始於此

☆職方外紀曰 24 行注 1 あり

☆海國聞見録 — 烏鬼國～小西洋 7 行★案 29 字
 — 人黑白不同～以鑽石爲寶 3 行

★源案二行書き約 7 行

☆海録 — 妙里士島～英吉利兵在此鎮守 13 行
 — ★源案 20 字此峽即坤輿圖～極南境
 — 又曰髻毛烏鬼國～海馬牙橙西瓜 5 行

[東阿利未加洲]

☆海島逸志曰 7 行注二行書き約 1 行あり

頗惡然葛	葛衙署也
東阿利未加洲～顏料	以上六國皆屬葡萄亞
阿偃東西～以飾宮室	以上二國皆屬阿丹

[北阿利未加洲四國]

嗜鴉片	採取本地所産麻依法配製亦曰鴉片
都尼司國	職方外紀作弗沙國
西界都尼司	亦古弗沙國境

重輯 [職方外紀]

馬邏可國	即摩羅果國
弗沙國	即都尼司國
有國名奴米弟亞	即南阿未利加土番

[南阿利未加洲各國]

田多稼峽達稔其首都也	此亦當云達穩峽西洋語倒耳
其峽東西通衢産酒～獸牙	原本無部落
故隣國所畏	原本無部落
摩耶斯滿山～徹數晝夜	原本無部落

重輯 [職方外紀]

更有一種～多皆愚蠢	即山牙臘土蠻見阿邁司尼國志中
-----------	----------------

〔海島逸志曰〕

天地之大有不可思議者矣	即大浪峯也小西洋利未亞極南之峽凡船回大西洋者過此日過峽
-------------	-----------------------------

四洲志十四・十五・十六 [一行40字] ・→海国図志卷22 (小西洋) [1行21字但し二行のものは42字]

- 『西阿利未加分兩大區～諸部産上銅』80行 小西洋の注として西利未亞洲あり
- 西阿利未加各國
- 『西阿利未加分兩大區～象牙歳値約十五萬員』46行
- 色黎安彌阿十國
- 「色黎安彌阿一区内～西臘低境内者居半」38行
- 安彌河以南至敏維臘河以北十四國
- 「霏落司國在嘉約之南東界～諸部産上銅』79行
- 重輯 (原無今補)77
- 利未亞之西～格物窮理之學注二行書き20字あり
- 又曰亞非利加海邊～本國將帥已領戰船赴彼行き怨11行

〔重輯〕

利未亞之西～格物窮理之學	四洲志中利未加各國頗詳未審此二地屬何國
--------------	---------------------

四洲志十七・十八 [一行40字] . . . →海国図志卷23 (小西洋) [1行21字但し二行のものは42字]

- 『中阿利未加洲地處～河岸長四里多商舶』79行 小西洋の注として中利未亞洲あり
- 「以上十九國皆與西洋通市～亦略有所聞附載於後」二行書き約5行 □中阿利未加各國二行書きの注37字あり
- 『丁麻杜國在中阿未里加洲～歐羅巴貨物無一不備』12行 ○『中阿利未加洲地處～河岸長四里多商舶』159行
- 「以上十九國皆與西洋通市二行書きの注で「多商舶」の後に付加される。
- 「以上六大部五小部皆尼阨河上游之國未與西洋通市』二行書き □(二字下げで) 以下附五部均自爲尊長 一行書
- (二字下げで) 嘉公那部～亦略有所聞附載於後』18行
- 『丁麻杜國在中阿未里加洲～歐羅巴貨物無一不備24行
- 「以上六大部五小部皆尼阨河上游之國未與西洋通市』二行書き

小まとめ

『四洲志』の原典が見当たらない以上、残された『小方壺齋輿地叢鈔』と『海国図志』50巻本とから、推測せざるを得ないのである。ここで比較したのは50巻本の23巻迄で、これらはアジアを中心とした記述の巻々である。紙幅の為、50巻全てに関したことは別稿に譲ることになるが、本字や俗字等の相

違はあるが、一応『小方壺齋輿地叢鈔』に収められている「四洲志」と『海国図志』の魏源の引用を取り除いたあとの本文とは一致している。『四洲志』は、主として国々のことは二行書きで本文あとに一段と活字の大きさを落として印刻しているが、『海国図志』では、これが不統一である。本来の『四洲志』がこの箇所をどう扱っているかという鍵を握ることになるが、中国で現存しているのであろうか。これが最大の関心事である。

このような報告は、後2回ほどの分量で締めくくる予定である。

注1 鎖国時代 日本人の海外知識 乾元社 昭和28.5.15

注2 近代中国 第17巻 所収「『海国圖志』餘談」

注3 『岩井博士古稀記念論文集』所収 「海国図志小考」1963

注4 関西大学東西学術研究所 関西大学出版部 著者及編集者 大庭 脩氏昭和42.3

注5 平成11年度の化学研究費により全国の国立大学の図書館と県立図書館、又主要な私立大学図書館に依頼してその『海国図志』収蔵について尋ねたもの。

注6 注3に同じ

注7 注2に同じ

注8 送付された書類によると「海国図志五十巻 清魏源撰 道光二十四年邵陽魏氏古微堂活字印本協力下さった方は、美濃部朋子氏である。記して感謝申し上げます。

注9 岡山大学大学院文化科学研究科紀要第9号「魏源による『海國圖志』-50巻本について-」2000.3

注10 引用書目については注の9の報告書に述べておいたが、この引用された分量が魏源の注と併せて「四洲志」との大きな違いとなる。

参考文献

- 海國圖志 (50巻本) 道光二十四年邵陽魏氏古微堂刻本(1844)十二冊二函 北京大学蔵本
小方壺齋輿地叢鈔 南清河王氏鑄版 上海貿易堂印行 岡山大学付属図書館蔵
荒川清秀著 近代日中学術用語の形成と伝播 地理学用語を中心に 白帝社 1997.10.22
鎖国時代 日本人の海外知識 乾元社 昭和28.5.15

追記

本文引用の記号は次のような意味を示す。

○ 『四洲志』の本文

★ 魏源の注記や考察した文

☆ 引用された諸本とその文

□ 『四洲志』にはなく『海國圖志』に記された題目と注記

この小論は科学研究費による。